

本尊の意義をたずねて

平野
修

目次

第一章 本尊って何だろう……	1
■ 何に向かって手を合わせているか……	1
■ 九字・十字の名号を問う……	3
■ なぜ阿弥陀如来なのか……	6
■ はっきりしない浄土真宗……	9
■ どうして絵像・木像より名号なのか……	12
■ 留守番か骨董品か……	16
■ 字に書いたものは燃えてしまう……	20
■ 蓮如上人のおおせ……	23

■ お墓・仏壇にまで惑う……………	26
■ 如来のさとりを得るのがお念仏……………	30
第二章 なぜお念仏なのか……………	32
■ 南無阿弥陀仏には「すがた」がある……………	32
■ 「すがた」がわからない……………	34
■ 教えの「すがた」の教わり方……………	37
■ 念仏せよ……………	40
■ なぜ念仏なのか……………	42
■ 念仏を勧められた理由をたずねる……………	45
■ 念仏を選ばれた意味……………	48
■ 聖人のつねのおおせ……………	51

■	そくばくの業をもちける身……………	54
■	「私」の正体……………	56
■	始めも終わりもない業の身……………	59
第三章 仏さまとは……………		
■	如来とは知らしめるはたらき……………	62
■	凡夫であるという正体に目覚める……………	64
■	教・行・信・証のすがた……………	69
■	本尊の意義……………	70

第一章 本尊って何だろっ

■ 何に向かって手を合わせているか

私どもは日頃、お仏壇に向かって手を合わせます。手を合わせる対象は、浄土真宗におきましては「阿弥陀如来」を安置して、礼拝合掌らいはいがっしょうするということでございます。

ところが、日本人の多くの方が手を合わせる対象は、必ずしも「阿弥陀如来」ばかりではございません。時には、名のよくとおった有名なお寺さんにお行きになりますと、そこには「釈迦如来」しゃかが安置してあったりします。そうであっても、我々は同じお寺だからというので手を合わせますね。あるい

は「薬師如来」と言われる仏さまを安置しているお寺さんもありますけれど、そこへ行けばやはり同じように礼拝合掌します。また、これは仏さまでなくて菩薩なのですが、「観音さま」というのを日本人は大変好んでおりまして、それにも手を合わせ、礼拝する。そうしますと、仏さまや菩薩であれば総てひつくるめて「本尊」というのでしょうか？ そういうことも気にかげられたことはないでしょうか。

真宗の教えを聞いている方で、「浄土真宗の本尊というのは阿弥陀如来ですか？」と尋ねる方がおられます。そのとおりだと答えますと、今度は「うちには阿弥陀如来のお仏像ではなくて、南無阿弥陀仏という六字の名号があります。あれはやはり本尊というのですか？」と尋ねられたりします。それも「本尊です」ということになると、次は「仏像の阿弥陀如来と、六

文字の漢字の名号と、これはどんな関係なんですか？」という疑問が出てきたり、あるいは「仏教はお釈迦さまから始まったのだから、釈迦如来を安置してもよいのではないか。なぜお釈迦さまではなくて、阿弥陀如来なのか」という疑問をもたれたりします。

■ 九字・十字の名号を問う

京都の東本願寺、真宗本廟しんしゅうほんびょうで、参拝に来られている方に「浄土真宗の本尊は何か？」と聞いたたら、大半の人が「親鸞聖人しんらんしょうにん」と答えたそうです。それはちよつと違いますね。親鸞聖人は「宗祖しゅうそ」であつて、本尊ではありません。本尊は「阿弥陀如来」です。あるいは「尽十方無碍光如来じんじつぽうむげこうじょうらい」とも申します。その仏さまのほうに我々は、手を合わせお参りします。そのお参りす

る時にどういうことを思っているかと言いますと、ほとんどの場合、ご先祖さまをまつるということに関係して、ご先祖さまに願いをしています。ご先祖さまに関係しない人は、「今日一日無事でありがとうございました」というふうに考えます。

本尊というのは、「今日一日ありがとうございました」という対象なのか、あるいはご先祖さまに関係して、何かを願ったり、祈ったりする対象であるのでしょうか。毎日のように私どもはお参りしておりますけれども、そのへんがどうもはつきりしないままになっているのではないのでしょうか。

そこで、先ほど言いましたように、「阿弥陀如来と南無阿弥陀仏」、「尽十方無碍光如来と帰命^{きみょう}尽十方無碍光如来」とはどう違うのですか、ということになるわけですね。

みなさん方は浄土真宗の門徒です。真宗大谷派教団に關係する人たちのお内ないぶつ仏は、繪像になつてゐるか、木像になつてゐます。そして両側に、向かつて右の方には「歸命尽十方無碍光如来」という漢字で十字じゅうじの軸が下がつてゐるはずです。向かつて左側には「南無不可思議光如来」という、漢字で言へば九くじ字の軸が下がつてゐます。そこで昔から、右側を十字の名号、左側を九字の名号という言い方をしますけれども、それが両脇に下がつております。それを見て、「これは何だろうか」という疑問をお持ちになられたことがないでしようか。あるいは慣れっこになつてゐるために、「それはこういうものなんだ」と思つてしまつてゐるのでしようか。ここを今日は一度、「何だろうか」というふうふうに疑問を持つていただきたいと思つてゐるのです。

■ なぜ阿弥陀如来なのか

私も、もともとはそのことに特に疑問があつたわけではありませんでした。しかし、在所ざいしょのお年寄りの方がよくお孫さんをお連れになつてお参りなさいますね。年寄りの務めのようにして、孫といっしょに「正信偈しょうしんげ」をあげて、お内仏にお参りします。そうすると、お孫さんは何にでも興味を持ちますし、正直ですから、「おばあちゃん、まんなかにある、あれは何か」と尋ねますね。そうすると我々が答えられるのは、「あれは仏さまだ」と。すると、お孫さんは「仏さまって何？」と聞いてきます。こう問われると、それ以上ちよつと答えの出してみようがありませんね。

さらに、「なんでそこにお参りするの？」と問われた時に、これこれの理由だと、お孫さんにわかるように答えることができるか、どうでしょうか。

「おばあちゃん、なんで毎日お参りするの？」と尋ねられて、まさか「ヒマだから」とは言わないでしょう。「いや、参らないといかんから、参つとるのや」とか、そんなことを言ってみても、お孫さんにはわかりません。みなさんならどうお答えになりますか？ 「私ならこんなふうに答えるだろうなあ」ということを思い浮かべながらお聞き願いたいのですけれども、どんなものでしょうか。

在所のお年寄りが私のところに来られまして、「どう答えたらいいのか」ということをお聞きになられたことがございます。私も、そんなことがひとつのきっかけになりました、「どう考えたらいいのか」と思うようになりました。

そもそも私たちは仏さまのことをどう考えているのでしょうか。そのへん

がたいへん曖昧あいまいになっていないでしょうか。仏さまということについて曖昧あいまいになっているから、なぜ「阿弥陀如来」なのか、お釈迦さまでもいいのではないのかと、そこがはっきりしない。

お釈迦さまなら歴史上の人です。インドにお生まれになられて、そして仏教を開かれて、人々を教化なさって、八十年の生涯を閉じられた、と。これだったらわかります。今は、おいでになれないけれど、ともかく過去に、ゴータマ・シツダールタというお名前の方がおいでになられて、のちにお釈迦さまとなられたんだと。これは信用できるとしても、「阿弥陀如来」ということになりましたと、「そんな仏さまが、この世においでになられたのか」ということになりましたと、そんな証拠はありません。

■ はつきりしない浄土真宗

みなさん方はご存じでしょうけれども、遠藤周作さんという作家がいらっしやいましたね。キリスト教関係の小説をいくつも書いておられたのですけれども、『侍』^{まわらい}という小説を書かれた頃だったでしょうか、あるテレビで記者が遠藤さんにインタビューしたのです。

そこで記者の方が、「遠藤さん、あなたのお書きになれる小説は非常に浄土真宗的ですね」と、こう言ったわけです。遠藤さんがどういうふうに答えるかと思っていましたら、彼はやや憤慨^{ふんがい}して「どこが浄土真宗的ですか」と言われました。「私の作品は浄土真宗ではない」と言うのです。さらに、「私はキリスト教の信者である」と言われました。「キリスト教というのは、ともかくにもイエス・キリストという人がこの世にいた。バイブル（聖

書)として残っているものがどこまで本当なのかはわからないけれども、ともかくそういう人が歴史上いたんだ。その歴史上いた人の言葉をとおして、自分は人生を考えたり、人間を考えたりして、この人の言うことは確かだと思うから、自分はキリスト者になっているんだ」と、そう言って、「浄土真宗的だなんて、とんでもない。あれは阿弥陀如来をもとにしているではないか。阿弥陀如来は歴史的存在ではない」というようなことでした。

つまり、お釈迦さまなら歴史上おいでになられたから、お釈迦さまの言われたことをとおしてその言葉に眼を開かれたとか、その言葉を聞いていたら自分のことを言い当てられたというので、お釈迦さまの言葉を信じて仏教徒になるということはあり得るかもしれない。しかし、「阿弥陀如来」というのは想像上の仏さまではないか、ということですね。そして遠藤さんは、

「自分は親鸞という人は大変尊敬している。なぜかというと、在りもしない仏さまをあれだけ一生懸命に説いている、あの情熱には頭が下がる」というのですね。

この遠藤さんのような発言は、今の我々にも通じます。つまり「あなた方は阿弥陀如来を信じていると言うけれども、この世にいないものをどうして信じるんですか。そんな、あてもない、頼りないものを信じてどうするんですか」と。こういうふうに言われた場合に、我々はどう答えますか。「ほっといてください」と言いますか。相手に向かつては、そう言つてすますこともできるでしょうけれども、自分自身のところにもはつきりしないものが残ります。